

1952年から2000年までの家庭科授業実践の変遷 —雑誌『家庭科教育』（家政教育社）「教材研究」の題目から—

表 真 美
(本学教授)

1. 研究の背景と目的

(1) 雑誌『家庭科教育』と家庭科

雑誌『家庭科教育』は、宮原小次郎氏により『家事及び裁縫』の誌名で1927（昭和2）年に4月号が創刊された（A5判152頁、50銭）。創刊のきっかけは、「家事科・裁縫科の文部省教員検定試験受験準備の講習会」を開催したことであった。その後増頁を重ね、1933（昭和7）年から1939（昭和13）年まで240～250頁であり、この間にも400、500頁に増頁している号が多く、特集号には812頁のものもあった。

1941年に159の教育雑誌が29に統合、さらに1943年に14に廃合された際にも存続し、誌名を『家事裁縫』とした。1945（昭和20）年『家政教育』に誌名変更、空襲による休刊の後1946（昭和21）年復刊、1948（昭和23）年2月号より『家庭科教育』と改名され、年12回に加え、増刊号が2005年3月まで発行された¹⁾。

最終巻は79巻であり、創刊から数えると実に79年の間継続した雑誌であった。その間、第2次世界大戦中の「家事科報国」「裁縫科報国」の時代を含め、昭和の初めから昭和20年は、家政教育が「我が国女子教育の中核として最も重きを置かれた時²⁾」であった。

第2次世界大戦後CIEの指導により、家庭科は一転して民主的な家庭建設のための教科となった。高度経済成長期に入ると時代を反映した形で男女別に、その後女子差別撤廃条約を経て男女共修が実現された。このような激動の時代の中で、『家庭科教育』は、「家庭科教育の実践者・研究者を育てた³⁾」雑誌といえる。

(2) 研究者・実践者にとっての『家庭科教育』

『家庭科教育』は「新進研究者にその理論と実践を表明する機会をあたえ続けてくれた⁴⁾」とされる。

1990年には①「教師の研究」（教壇実践、教材、施設・設備など）、②「研究論文」（家庭科教育、女子教育、家政学などに関連した研究論文）、③「教室の窓」（教え子の事、職員室の話題、親との会話などから目を開かされた思いなど）、④「家政春秋」（日々の生活の出来事、見聞きしたこと、感想など）の4種の特集号が募集されていた⁵⁾。

毎号およそ15編の投稿論文・依頼論文と実践報告である「教材研究」が掲載され、総ページ数は号により異なるが120頁前後（1990年代）であった。毎月12号に加え、特定のテーマを掲げた特集号も刊行された。多くの研究や実践が蓄積されたため、バックナンバーを調べて研究に役立てた例もあった^{6) 7)}。

A5判の持ち歩きしやすいサイズであり、1990年（64巻）6号は550円、1996年（70巻）6号は680円、2004年（79巻）3号は700円と徐々に値上げされていた。

(3) 『家庭科教育』の休刊

創刊から79年後、2005年3月をもって『家庭科教育』は休刊、実質的な廃刊となった。「最終号」（写真1）には、牧野カツコ、仙波千代、内藤道子、新福祐子、松島千代野、武藤八重子、日下部信幸、小木紀之、佐藤文子、河野公子（敬称略、掲載順）といった、著名な家庭科、家政学研究者が休刊に向けての原稿を寄せた。

編集は、創刊者宮原小次郎氏の後を息子が引き継ぎ、1959年からは最終号までは創刊者の孫である宮原佑弘氏が行った。佑弘氏はアイオワ州立大学家政学部に留学経験がある。氏は最終号で、「1968年から新しく編集主任が入社し順調だったがだんだん反文部省的な内容が読者離れを起し、急激に部数が減ってしまった。1961年10月号から再び私が編集をすることになり一時は持ち直した。しかし不況にもなり、学校図書費の削減、家庭科専科の先生の減少などから年々読者が減ってしまった。定価も上げられず、少しずつ頁を減らし、現在の頁までやせ細ってしまった。」と休刊の理由を述べている⁽⁸⁾。



写真1 『家庭科教育』79巻3号(2005年最終号)

(4) 研究の目的

以上のように、『家庭科教育』は極めて長きにわたり、家政学、家庭科教育の研究や学校現場での家庭科の授業実践を公開する場として機能していた。特に「教育実践研究発表の場」⁽⁹⁾であり、「教育現場ですぐに役立つ内容が載っている雑誌として知られていた」⁽¹⁰⁾と言われた。

そこで本研究では、『家庭科教育』に継続的に記事として掲載されていた、学校現場における授業実践を教師が執筆して報告した「教材研究」を研究資料とし、学習指導要領改訂ごとの変遷について明らかにすることを目的とする。

『家庭科教育』に掲載された研究論文は国立情報学研究所学術情報ナビゲータ「cinii」により题目的検索が可能であるが、「教材研究」はそれに含まれず、国立国会図書館の館内のみPDF閲覧となっている。極めて貴重な情報提供が期待できる。

2. 研究方法

(1) 研究資料

本研究が対象とした研究資料は、「家庭科教育」の誌名で発行された1948年から2004年の57年間の各号である。1978年までは国立国会図書館の蔵書、1979年から2004年は欠本(国立国会図書館蔵書を利用)を除き、研究室の蔵書を利用した。

尚、国立国会図書館において欠本であった以下の計18冊については、対象に加えていない(1948年1・2・4・5号、1950年1・11・12号、1955年1号、1959年10・11号、1962年10・11号、1964年7・8・9・10・11・12号)。

1952年1月号より2000年7月号まで、欠本を除く565冊に掲載されていた「教材研究」計3067編を分析対象とした。

(2) 分析方法

1) 時代区分

表1 平成11年までの学習指導要領改訂の変遷

改訂年	概要	実施年
1958(昭和33)～1960(昭和35)年	教育課程の基準としての性格の明確化 (独特の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等) (系統的な学習を重視)	小学校1961年、中学校1962年、高等学校1963年実施
1968(昭和43)～1970(昭和45)年	教育内容の一層の向上(「教育内容の現代化」) (時代の進展に対応した教育内容の導入) (算数における集合の導入等)	小学校1971年、中学校1972年、高等学校1973年実施
1977(昭和52)1978(昭和53)年	ゆとりある充実した学校生活の実践＝学習負担の適正化 (各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる)	小学校1980年、中学校1981年、高等学校1982年実施
1989(平成元)年	社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成 (生活科の新設、道徳教育の充実)	小学校1992年、中学校1993年、高等学校1994年実施
1998(平成10)～1999(平成11)年	基礎・基本を確実に身につけさせ、自ら学び自ら考える力などの【生きる力】の育成 (教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設)	小学校2002年、中学校2002年、高等学校2003年実施

(文科省ホームページより筆者作成)

分析の時代区分は、学習指導要領の改訂ごとに行なった。学習指導要領はこれまで、①1958～1960(昭和33～35)年、②1968～1970(昭和43～45)年、③1977～1978(昭和52～53)年、④1989(平成元)年、⑤1998～1999(平成10～11)年、⑥2008～2009(平成20～21)年、そし

て現行の⑦2017～2019（平成29～31）年の7回改訂され、各々3～5年後に全面実施されている（表1）。「教材研究」は小・中・高等学校の実践を含むため、以下のように、高等学校改訂の年を区切りとした。Ⅰ、1948年～1960年、Ⅱ、1961～1970年、Ⅲ、1971～1978年、Ⅳ、1979～1989年、Ⅴ、1990～1999年、Ⅵ、2000～2004年。しかし、後述のように、「教材研究」の掲載は1952年より2000年7月までであった。Ⅰは1952年から、2000年はⅤに含み、5つの時代区分により分析することとした。

2) 5つの時代区分ごとにみた家庭科の変遷

表2 家庭科授業時間数（単位数）の変遷

改訂年	小学校			中学校(註)				高等学校		
	5年	6年	計	必修	1年	2年	3年	計		
1958 ～60	70	70	140	技術・家庭 女子向き	105	105	105	315	家庭一般 (女子のみ)	4単位
1968 ～70	70	70	140	技術・家庭 女子向き	105	105	105	315	家庭一般 (女子のみ)	4単位
1977 ～78	70	70	140	技術・家庭 家庭系列	70	70	105	245	家庭一般 (女子のみ)	4単位
1989	70	70	140	技術・家庭 家庭系列	70	70	70-210- 105 245	家庭一般・生活一 般・生活技術から 選択	4単位	
1998 ～99	60	55	115	技術・家庭 家庭分野	70	70	35 175 35 17.5 88	家庭基礎・家庭総合・ 生活技術から選択	2または 4単位	

註：中学校では、1989年の改訂までは、女子のみではあるが「技術・家庭」の時間数が家庭科の授業数であり、加えて選択科目としての時間数もあった。1989年の改訂では、男女ともに木材加工、電気、家庭生活、食物の4領域を学び、生徒の興味に応じて3領域（家庭科は被服、保育、住居）を選んで履修となった。すなわち、技術・家庭＝家庭科の授業数ではなく、授業数は激減した。ただし選択科目等の時間の中に家庭科を置き、必修科目としての授業時数の削減を補っていたと考えられる。1998年改訂により完全に男女が同じ内容を学ぶようになってからは、技術・家庭の授業時数の半分が家庭科の授業数となり、時間数はさらに減少した。

伊藤菜子「家庭科授業時間数減少をめぐる課題」『日本家政学会誌』64（2013）より筆者作成

全体的な学習指導要領改訂の観点は表1に示すとおりであるが、家庭科は社会的背景により独自の変遷を遂げてきた。また、学習指導要領の改訂とともに、授業時間数が減少した（表2）。小学校・高等学校は本研究の研究資料が影響を受けた4回目の改訂まで、各々第5・6学年各70時間、4単位と減少はみられないものの、中学校は3回目、4回目の改訂で時間数を減らした。

以下、提示した時代区分ごとの、教科としての家庭科の変遷を概観する^{11)～14)}。

Ⅰ、1952～1960（昭和27～35）年は、家庭科の成立期、教育内容の確立期であった。CIE（民間情報教育局）により、新しい民主教育の一角を担うものとして、社会科とともに小・中・高

校の家庭科が新設された。家庭科は、男女共学の理念のもとに「民主的な家庭建設の教育」を掲げた。中学校は職業・家庭科として始まり、初期の高等学校家庭科は、男女が選択して学ぶ教科として出発した。

Ⅱ、1961～1970（昭和35～45）年は、家庭科が女子用教科へ傾斜した時代であった。日本経済の飛躍的発展と世界的な科学技術の競争、それを支える性別役割分業体制の必要性を背景に、中学校「技術・家庭科」では、男子は生産技術を、女子は家庭生活技術を中心に学習する「男子向き」「女子向き」という性別コースが設けられ、高等学校では、女子のみが「家庭一般」4単位を必履修することとなった。

Ⅲ、1971～1978（昭和46～53）年は、高度経済成長を背景に、性別役割分業に基づく教育が継続された時代であった。小学校では男女共修が維持されたが、教育内容は衣食住を中心とした技能習得に重点が置かれた。

Ⅳ、1979～1989（昭和54～平成元）年は、男女共修に向けての家庭科の時代であった。高度経済成長がもたらした効率と利便性を追求した生活スタイルによる生活体験不足が問題視されるとともに、国内外で男女平等が求められた。中学校技術・家庭科では、これまでの男子・女子向きの構成から、各学校が男女生徒の興味・関心などを考慮しながら適切なものを選択して履修できる「男女相互乗り入れ」の形態になった。「女子差別撤廃条約」の批准にあたり、文部省において1984年「家庭科教育に関する検討会議」が設けられた。

Ⅴ、1990～2000（平成2～12）年は、小・中・高等学校において男女共修が実現（1994年～）するとともに、家庭科がバッシングされた時代であった。1990年代には、新自由主義とも結びつく男女共同参画社会やジェンダー・フリー教育、家庭科の男女共修、性教育等への批判が高まり、家庭科教科書もその標的となった。1990（平成2）年度小学校家庭科教科書1点、1992（平成4）年度高等学校家庭科教科書1点、1996年（平成8）年高等学校家庭科教科書4点が検定不合格となった。また、中学校では、男

女共に木材加工，電気，家庭生活，食物の4教科を学び，生徒の興味に応じて3教科（家庭科領域としては被服，保育，住居）を選んで履修することになった。この時点で，技術・家庭という教科の総時間数イコール家庭科の授業時間数ではなくなり，授業時間数は激減した¹⁵⁾。

3) 分析方法

まず，「教材研究」すべての題目をテキストデータ化し，データベースを作成した。次に，テキストマイニングソフト「KH コーダー」を用いて，時代区分ごとに頻出語を抽出，共起ネットワークにより，ワードの頻度と関係を視覚化し，実践の全体的傾向を明らかにした。さらに，時代区分ごとに特徴的な語を含む実践事例について示した。

3. 研究結果と考察

(1) 「教材研究」について

「教材研究」は，前述のように1952年1月号に始まり，2000年7月号まで掲載されていた。1950年代から1980年代は，号により抜ける学年があったものの，毎号に小五，小六，中一，中二，中三，高校の6編が掲載されていた。

1990年代になると，掲載されない学年が多くなり，1995年4月号からは，毎号「小学」「中学」「高校」の3編となった。さらに1990年代後半は掲載される学校種が減り，小学校・中学校・高等学校あわせて2編，1編となる号もあった。1999年4月号からは，幼稚園の実践報告である「幼稚園発 素晴らしき小宇宙」が始められ2000年6月号まで15回続いた（「幼稚園発」は研究対象には含んでいない）。

Iは718編，IIは683編，IIIは546編，IVは727編，Vは393編であった。

2000年7月号に掲載された49年間最後の「教材研究」は，愛知県立起工業高等学校教諭による食生活指導の実践事例であった¹⁶⁾。当校は複数の科により構成され，「科によって生徒の興味・関心が違い，クラスの中でも学習能力の差が大きい」生徒を対象とした授業の工夫，授業中の様子が詳細に述べられていた。子供扱いと抗議しながらも無心となって行った中学生向け

のシール教材を持ち，にこやかに笑う男子生徒たちや，配布したプリント，ワークシートの写真が掲載されていた。

(2) I期(1952～1960年)における「教材研究」

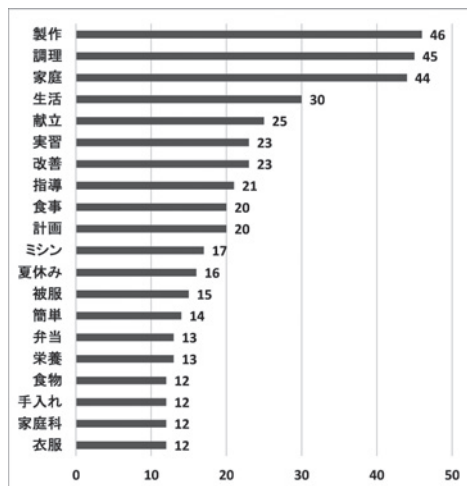


図1 I期の頻出語

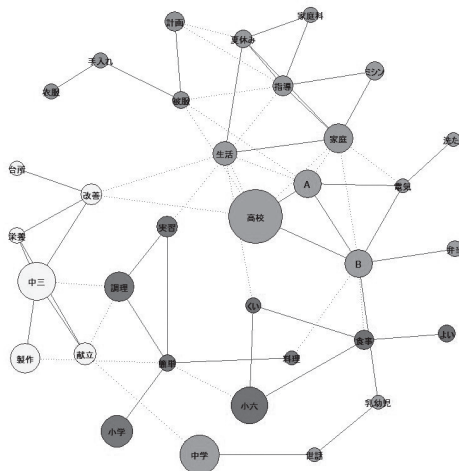


図2 I期の共起ネットワーク

1) I期における頻出語

718編の「教材研究」の題目において，学校種や学年を除外した頻出語を12語まで示した。製作，調理，家庭が多く，生活，献立，実習の語が続いた（図1）。

I期の共起ネットワークでは，6つのグループが示された（図2）。丸の大きさは頻度の度合い，丸が繋がる線によりワードどうしのつな

がり（同一の題目での語の使用）が示されている。「高校」は電気・弁当など、「中学」は世話・保育など、「中三」は製作・献立・栄養・改善など、「小学」は簡単・調理・料理など、「小六」は「食事」と結びついていた。「被服」と手入れ・計画など、「指導」は家庭・ミシン・夏休みなどと結びついていた。

2) I期における実践事例

最も頻度が高かった「製作」について、何を製作しているかを示した（表3）。中学校が最も多く、次いで小学校であった。すべての学校種を通して、ほとんどが被服実習であり、I期の学習指導要領の内容を反映して、小学校に住居領域の製作が4件（ぞうきん、整備箱のカーテン、美しいくず入れ、整理箱）、中学校に食物領域1件（献立）が含まれるだけであった。「ひとえ長着」や「改良羽織」など、和裁も登場した。

表3 I期における「製作」を含む実践

「製作」の実践	学年	「製作」の実践	学年
室内装飾品	小五	わら草履	中一
前掛および水泳用褌	小五	スリッパ	中一
簡単な袋物	小五	ブラウス	中一
袋もの	小五	スカート	中一
ぞうきん	小五	献立	中二
整備箱のカーテン	小五	スラックス	中二
台ふぎと前かけ	小五	スラックス	中二
台ふぎん	小五	ひとえ長着	中二
ミント	小五	手袋	中二
ふくろ類	小五	衣服	中二
美しいくず入れ	小五	女物ひとえ長着の型紙	中二
整理箱	小五	被服	中二
製作品の計画発表	小六	セーラーカラー	中二
製作品の計画発表	小六	ワンピース・ドレス	中二
生活を便利にするもの	小六	改良ベビー服	中三
まくらカバーや前かけ	小六	改良羽織の	中三
夏制服	高校	半袖ブラウス	中三
平常着としてのスカート	高校	日常衣	中三
下がき	高校	スラックス	中三
スカート	高校	ワンピース・ドレス	中三
被服	高校	ワンピースドレス	中三
制服ブラウス	高校		
スカート	高校		
簡単なジャケット	高校		
簡単なジャケット	高校		

(3) II期(1961~1970年)における「教材研究」

1) II期における頻出語

683編の「教材研究」の題目において、学校種、

学年と形容詞を除外した頻出語を15語まで示した（図3）。汎用される「家庭」に次いで頻度が高かったのは「調理」であった。そして「製作」「ミシン」も多くみられた。

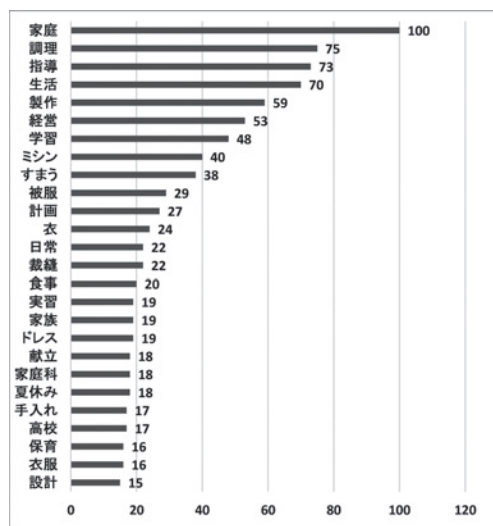


図3 II期の頻出語

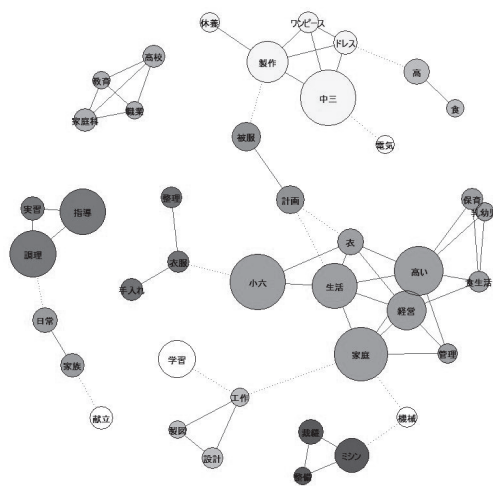


図4 II期の共起ネットワーク

2) II期における実践事例

II期では、頻出語や共起ネットワークからも（図4）、依然、特に中学校における被服製作の実践報告が多いことがうかがえるが、I期と比較して「調理」の語が頻出していることが特徴といえる。そこで、そこで、どの様な実践が、報告されていたか明らかにした。中学校は実践数が多かったため、同一の題目が複数回登場し

表4 Ⅱ期における「調理」を含む実践

「調理」を含む題目	学年	「調理」を含む題目	学年	「調理」を含む題目	学年
生野菜の調理	小五	青少年向けの調理	中一	家族の日常食の調理	中二
野菜サラダの調理	小五	青少年期の日常食の調理	中一	家族の日常食-調理実習に何を求める	中二
よい調理	小五	青少年期の日常食-調理の計画	中一	夏の調理	中二
調理のくふう (2件)	小五	青少年期の日常食-調理の実習	中一	冬の調理	中二
楽しい調理 (3件)	小五	調理-献立の指導	中一	本校の調理実習指導の実際	中二
こんだてと調理	小六	日常食の調理 (2件)	中一	調理実習の指導 (4件)	中二
調理の工夫	小六	調理学習に当たって	中一	調理指導について	中二
調理のくふう (6件)	小六	調理学習をかえりみて	中一	調理における総合実習指導について	中二
たのしい調理	小六	調理基礎技術を徹底させるために	中一	調理の学習についての一考察 (2件)	中二
こんだてと調理	小六	調理教材における教材研究の視点	中一	調理の指導法	中二
こんだてと調理	小六	調理-食物の味	中一	調理の能率 台所の施設・設備	中二
計画的に調理しよう 献立と調理	小六	調理に当たって	中一	調理の能率化	中二
調理実習に入るまで	高	調理における学習の評価と指導上の問題	中一	行事食・客ぜん調理 (3件)	中三
1学期の調理実習	高	調理の基本について	中一	消化しやすい食物の調理	中三
2学期の調理実習	高	調理の指導	中一	特別食の調理 (2件)	中三
調理実習の準備	高	調理の指導法	中一	病人食の献立と調理	中三
調理実習指導	高	調理-評価のこころみ	中一	老人食の献立と調理	中三
調理の指導について	高	調理用具の管理	中一	調理	中三
調理実習について	高			調理-揚げ物	中三
				調理室・被服室とその運用	中三

た場合は、右に回数を記入した(表4)。題目に実習の内容を示すものは少なかった。中学校では、青少年期の日常食、老人食・病人食、行事食・客ぜんの調理実習の実践が含まれていた。

(4) Ⅲ期(1971~1978年)における「教材研究」

1) Ⅲ期における頻出語

546編の「教材研究」の題目において、学校種や学年。「する」「もの」などの汎用語を除外した頻出語を12語まで示した(図5)。Ⅲ期は、育てる、過程、わかる、値打ち、手足、いかす、生きる、楽しい、地域など、これまで上位に挙がってこなかった語が認められた。

Ⅲ期の共起ネットワークでは、9つのグループが示された(図6)。高校は生活・家庭・食品と、中三は指導と結びつき、生きる・学力・過程、実践・求める・意欲・高めるといった、これまでにない語のグループも生まれていた。

2) Ⅲ期における実践事例

対象とした「教材研究」の数が少ないにもかかわらず、多様な語が頻出したのは、数号にわたり特集して同じテーマで実践報告がなされたためである。例えば「ものの値打ちがわかり、

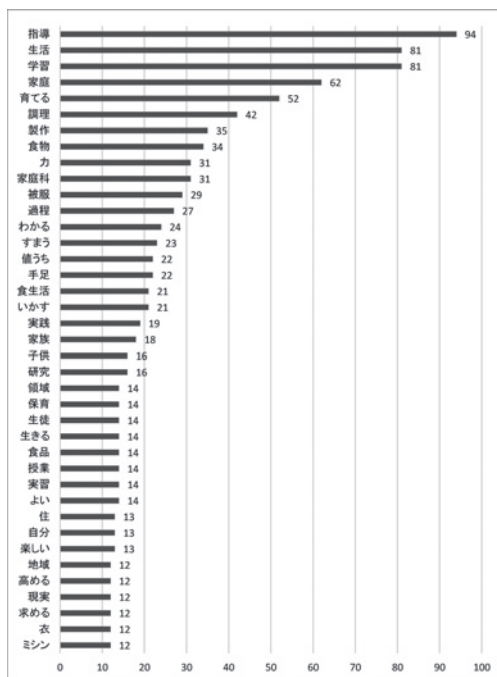


図5 Ⅲ期の頻出語

手足にいかしていける力を育てる指導(中二・22回)、「生きた学力を育てる授業過程の研究」(中三・11回)、「意欲を高め、実践力を伸ばす指導過程を求めて」(中二・5回)、「地域や生

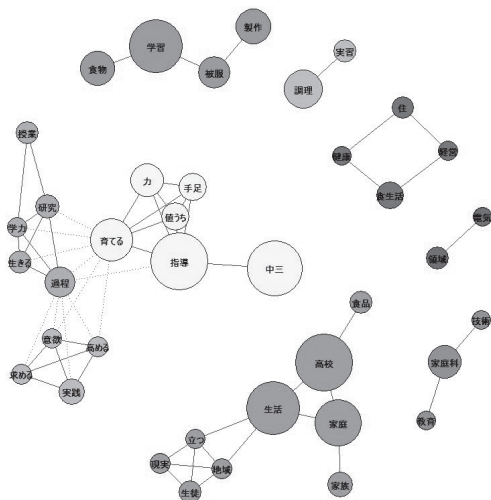


図6 Ⅲ期の共起ネットワーク

徒の生活の現実に役立つ○○（各々の領域の実践）」（中二・11回）などである。この時期から、力・学力・生きる・高めるなどの語が頻出するようになった。

「製作」に関しては、中三の「ワンピースドレス」の製作が12件、中二の「休養着」「パジャマ」の製作が合わせて10件、中一の「ブラウス」の製作が11件、高校では「ツーピースドレス」が2件登場した。

(5) IV期(1979~1989年)における「教材研究」

1) IV期における頻出語

727編の「教材研究」の題目において、学校種や学年、「する」を除外した頻出語を20語まで示した(図7)。

IV期の特徴は、「食物」が上位に上がり、他にも食領域の「調理」「食生活」「食事」「献立」、「食品」(19語)が上位を占めた。同様に、「保育」の頻度がこれまでよりも高くなった。また、これまでになかった「社会」、「連帯」(17語)が多く使われていた。

IV期の共起ネットワークは、8つのグループが示された。高校は生活・設計・家庭と、中三は保育と結びついた。授業・過程、食品・加工、被服・製作のグループ、また、社会・連帯・矛盾といったこれまでにない語が集まったグループが認められた(図8)。

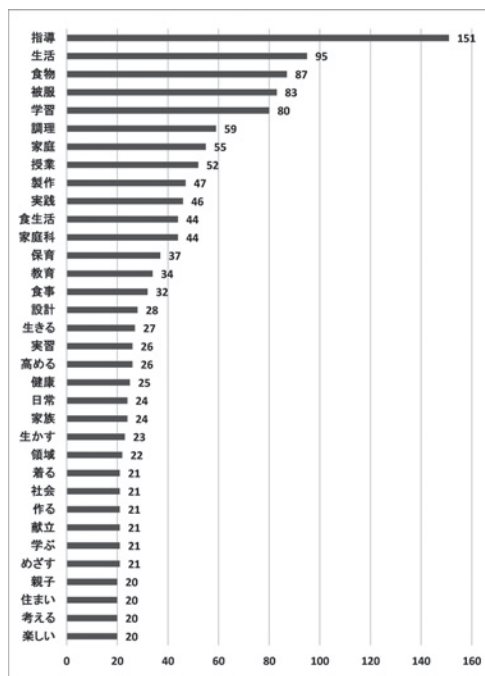


図7 IV期の頻出語

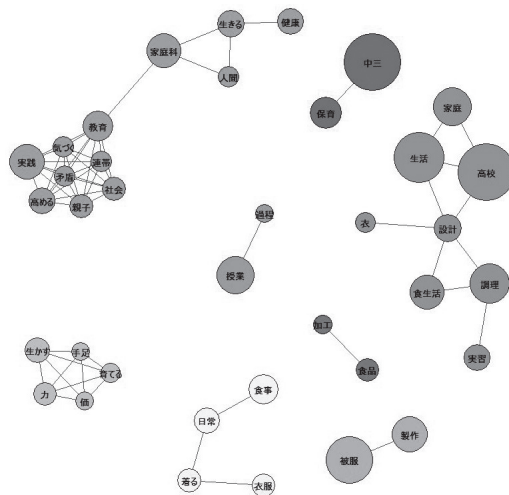


図8 IV期の共起ネットワーク

2) IV期における実践事例

上述の共起ネットワークにおける「社会」を含むグループは主に「親子の連帯を高め、社会の矛盾に気づかせるための教育実践」シリーズ(小五・16回)によるものであった。しかし、他にも以下のような「社会」の語を含んだ題目がみられた。「教科書をはなれて広く社会に目

をひらこう」(中二),「服装の歴史と女性の社会的地位」(中三),「わたしと家庭と社会」(小六),「出産と育児(社会と子ども)」(高校)。

食物領域に関しては,「食品安全性に敏感な子を」(小六),「食品添加物(一)(二)(三)」(中一),「加工食品とその利用」(中二),「食品加工について考える」(中二),「食品加工を通して加工食品を考える」(中二)など,食の安全性や加工食品についての実践が加わった。

また,調理実習に関する実践は依然として多いが,「健康に生きるための食物学習」(中二・5回),「主体的に学び生活に生かす栄養学習(1)(2)」(中一)など,理論的な食物指導の実践が増加した。

また,これまでよりも上位だった「保育の実践」については中三対象のものが多く,「命」と結びつける実践が複数見られた(表5)

表5 IV期における「保育」を含む実践

「教材研究」の題目	学校種
保育	中三
やる気で学ぶ生徒を求めて 保育	中三
保育教育の在り方を求めて	中三
保育	中三
保育	中三
「保育」の指導	中三
「保育」の指導(導入)	中三
「保育」の指導(幼児の観察)	中三
保育の指導 おもちゃの製作(1)(2)	中三
保育	中三
保育の指導 指導を終えて	中三
保育でどう学ばせるか	中三
保育(2) 幼児の生活探り	中三
保育(2) 幼児の遊び道具	中三
保育(3) 幼児の食事	中三
地域に根ざした保育(1)~(5)	中三
非行と家庭科教育 栽培と保育の学習を通して	中三
「保育」の指導	中三
「保育」作品の製作を通して	中三
保育の指導(1)(2)	中三
保育の指導(1)(2)「いのち」を見定める保育の学習	中三
保育	中三
保育の学習	高校
保育 その一「人として育つ」ということ	高校
保育 その二「狼に育てられた子」	高校
保育(1)	高校
保育の指導(1)(2)	高校
保育の指導	高校
保育分野導入の教材「命を生む」という責任を感じるにはー	高校
保育学習における視聴覚教材の効果ー視聴覚教材のテーマの影響ー	高校
保育領域の教材「布の絵本」作りから保育学習への関心を高める試みー	高校

(6) V期(1990~2000年)における「教材研究」

1) V期における頻出語

393編の「教材研究」の題目において,学校種や学年,「する」などの汎用語を除外した頻

出語を15語まで示した(図9)。

V期では, これまでもあったが上位にあがらなかった「楽しい」,そして「総合」が上位にあがり,新しく「主体」「高齢」「男女」が登場したことが特徴であった。

共起ネットワークでは,9つのグループが示された。「楽しい」は家庭科・学習・学ぶ・小六と,「総合」は小学・可能・題材と,「男女」は中三・保育・被服と「主体は」は力・生き

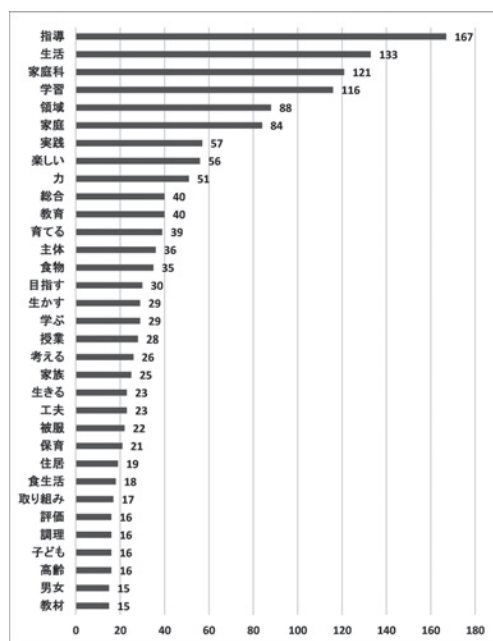


図9 V期の頻出語

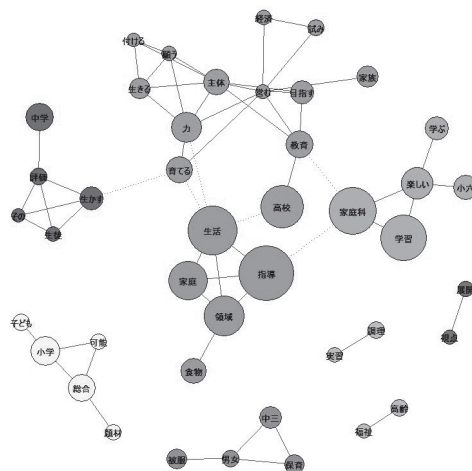


図10 V期の共起ネットワーク

表6 V期における「楽しい」を含む実践

「楽しい」を含む「教材研究」の題目	学校種
いつもの題材に楽しい—工夫を—いろいろな卵料理作りの実践から—	小学
楽しく練習して、長く使おう（練習しながら作品に仕上げる工夫）—小物作り・ミシン縫いの実践	小学
楽しく学ぶ家庭科—家庭を連携しながら実践的な態度を育成する食物指導—	小五
楽しく学ぶ家庭科—生活に生きて働く力を育てる「家族の生活と住居」の指導を通して	小五
楽しく学ぶ家庭科—科学的根拠を踏まえたゆで卵の調理—	小五
楽しく学ぶ家庭科 根拠と結びつけて理解させる家庭科指導—「ミシン縫い」の指導を通して	小五
楽しく学ぶ家庭科 一人一人の能力が生きる家庭科の指導をめざして「買い物仕方」	小五
楽しく学ぶ家庭科 縫う学習を通して 作品のできる喜びと生活化への意欲を育てる	小五
楽しく学ぶ家庭科 身の回りの整理・整頓ができる児童を育てる「住居と家族」の学習	小五
楽しく学ぶ家庭科 感動的な体験を生かした「家族の生活と住居」の学習	小五
楽しく学ぶ家庭科「家庭科だより」の発行を通して家庭との連携を図る試み	小五
楽しく学ぶ家庭科「家庭科だより」の発行を通して家庭との連携を図る試み（続）	小五
楽しく学ぶ家庭科 生涯にわたって学び 続ける基礎となる家庭科教育を目指して	小五
楽しい家庭科学習指導（1）～（12）	小五
楽しい会食	小六
楽しい家庭科学習指導（1）（2）（3）（4）（5）（6）（7）（8）	小六
楽しく学ぶ家庭科 生活を見つめ、学び続ける基礎となる家庭科教育を目指して（1）（2）	小六
楽しく学ぶ家庭科VTR「楽しい家庭科」を活用して	小六
楽しく学ぶ家庭科（5）コンピュータ利用による住居領域の指導	小六
楽しく学ぶ家庭科（7）～（8）	小六
楽しく分かる学習	小六
男女で楽しく生き生き学習する被服領域（6回）	中学
見た目がよく、動きやすいショートパンツの本縫い—男女で楽しく	中学
楽しい住居—（消費者教育の視点から）	高校

る・願う・営む、そして「高齢」は福祉と結びついてきた（図10）。

2) V期における実践事例

ここでは、この期に新しく上位にあがった語がどのような実践事例の題目に含まれていたのかを紹介する。

「楽しい」を題目に含む実践は殆どが小学校であるが、中学校、高等学校にもみられた。小学校では「楽しく学ぶ家庭科」の冠で多くの実践が掲載された。中学校は2編のいずれも「男女で楽しく」との文言であった（表6）。

「男女」はすべて中学校の実践であり、表6にもある「男女で楽しく生き生き学習する被服領域」の他、「男女共学による保育学習の取り組み」（2回）、「男女共学による保育の学習を通して」（3回）などがみられた。また、「福祉」「高齢」はすべて高等学校の実践、両語は同じ題目に含まれており、「高齢者の生活と福祉」領域の実践であった。

また、小学校では「総合的な題材の構想」「小学校の家庭科学習と『総合的な学習』の関連を

考える」「総合的な家庭科学習の可能性」、高校では『『総合学科』における家庭科教育』『高等学校家庭科における総合的学習の試み』（高校）といったシリーズが4回から12回にわたり掲載された。

（7） 考察

前述のように『家庭科教育』は「教育現場ですぐに役立つ内容が載っている雑誌」と言われており、掲載された「教材研究」の題目は、当時の実践の様子を示すものと考えられる。

全体を通して言えることは、1期からⅣ期までの「製作」と「調理」の語の頻度が高かったが、Ⅴ期に急減したことである。Ⅰ期は「製作」の語の頻度が1位・「調理」2位、Ⅱ期は「調理」2位・「製作」5位、Ⅲ期は、「料理」6位・「製作」7位、Ⅳ期は「調理」6位・「製作」9位、Ⅴ期は「調理」29位・「製作」78位となった。前述のように、中学校の時間数はⅣ期に減少、Ⅴ期にはさらに大幅に減少した。特に被服製作は時間数減少の影響を直接受けていると考えら

れる。

I期は、「製作」の語が頻出し、小学校の製作は当時の学習指導要領に明記されていた住領域での製作を含んでいたが、特に被服製作に重点が置かれていたことがうかがえる。中学校では和裁の課題も含まれていた。1958年～1960年に教育課程が明確化する以前(表1)は、前述のように「家庭科」の確立期であった。「民主的家庭」とはいいながらも、学校現場では家庭科への切り替えが充分には行われておらず、家事科・裁縫科の名残が垣間見える。

II期は、「調理」の語が頻出した。高度経済成長期に性別役割分業が明確化し、また、急速に流通が発展して人々の生活が豊かになり、食生活も急速に豊かになった時代であった。家庭科における調理の役割も高まったのであろう。

III期は「教材研究」の複数回続くシリーズの題目に使われた「生活」「家庭」「学習」「育てる」が頻出語の上位となったが、具体的な内容を表す語では依然として「調理」「製作」がもっとも多かった。中学校1年生にブラウス、2年生でパジャマ、3年生ワンピース、そして高等学校ではワンピースが教材として採用されており、中・高の学校現場では女子対象に技能重視の教育が行われていたことが推察できる。

IV期は「食物」「調理」「食生活」「食事」「献立」「食品」など多様な食物関連の語が上位に上がり、食物分野が重視されていたことがわかる。また、食の安全性や食品添加物、加工食品など、調理実習だけではない、食物関連の多様な実践が複数みられた。この時期、高度経済成長期における大量生産大量消費などによるひずみが社会問題になった。学校現場では社会的要請を受けた実践が行われていたと考えられる。また、「保育」がこれまでよりも上位に上がった。1970年代から80年代にかけては、学校の「荒れ」が顕在した時代であり、「保育」は「命の教育」としてこれまで以上に重要視されたのではないだろうか。

V期は前述のように男女共修が実現、時間数が減った時代である。一方で、情報化や国際化、価値観の多様化などの社会の変化やいじめや不

登校などを背景に、思考力・判断力・表現力などを重視した新しい学力観の提起がされた¹⁷⁾。隔週週5日制となり体験活動が重視され、「自ら学ぶ意欲」が学習指導要領改訂のポイントとなった。「教材研究」には「楽しい」の語が増え、家庭科にも自ら学ぶ学習意欲を高める「楽しさ」が求められたと考えられる。また、この時期「総合」というキーワードが教育界に現れた。1994年に高等学校に「総合科」が新設され、「総合科」の家庭科教育についての実践も掲載された。「総合的な学習の時間」は1998年改定の学習指導要領において提示され、2002年に全面実施された(図1)。V期は実施前の期間であったが、シリーズが組まれ、多くの実践が掲載されていた。「教材研究」は新しい状況にも対応していたことがわかる。また、小学校現場では全面実施前に研究的な実践が行われていたことがうかがえる。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、雑誌『家庭科教育』(家政教育社)に継続的に記事として掲載されていた、学校現場における授業実践を教師が執筆して報告した「教材研究」を研究資料とし、学習指導要領改訂ごとの家庭科授業実践の変遷について明らかにすることである。1952年から2000年に掲載された3,067編の「教材研究」の題目をデータベース化し、5期の時代ごとにテキストマイニングソフトにより分析した。

I期(1952～1960年)は「製作」「調理」の語が頻出し、特に被服製作の実践が多く、戦前からの教育の名残がみられた。II期(1961～1970)は「調理」が頻出し、学校現場での性別役割分業を背景とした技能教育がうかがえた。III期(1971～1978)も「調理」「製作」が多く、引き続き女子向けの技能教育が重視されていた。IV期(1979～1989年)は「調理」以外の食物関連の語、「保育」が目立つようになり、家庭科への社会的要請がうかがえた。V期(1990～2000年)は「調理」「製作」の語が激減し時間数の減少の影響が表れるとともに、「楽しい」「総合」など新しい学力観にもとづく実践が行

われていることが示唆された。

今後は、今回作成したデータベースを用いて領域や授業内容ごとの実践を特定し、授業実践の内容の変遷について明らかにしたい。

文 献

- 1) 宮原佑弘「編集後記」『家庭科教育』79巻3号(2005)
- 2) 西野みよし「戦前の家事科のあゆみ」『家庭科教育』30巻4号(1956)10-13
- 3) 内藤道子「家庭科教育の研究者・実践者を育てた『家庭科教育』」『家庭科教育』79巻3号(2004)71-72
- 4) 小木紀之「『家庭科教育』は永遠不滅」『家庭科教育』79巻3号(2004)81-82
- 5) 「原稿募集」『家庭科教育』64巻6号(1990)11
- 6) 日下部信幸「『家庭科教育』と教材・教具の開発研究」『家庭科教育』79巻3号(2004)79-80
- 7) 佐藤文子「『家庭科教育』とともに—藤枝恵子先生、そして私—」『家庭科教育』79巻3号(2004)83-84
- 8) 前掲(1)
- 9) 新福祐子「私にとっての『家庭科教育』」『家庭科教育』79巻3号(2004)73-74
- 10) 前掲(3)
- 11) 日本家庭科教育学会編『家庭科教育50年—新たな奇跡に向けて—』(2000)1-50
- 12) 綿引伴子「学習指導要領改訂の背景と家庭科教育の課題」『家族関係学』37号(2018)63-71
- 13) 多々納道子「家庭科発展の歴史」『小学校家庭科の指導』建帛社(2010)22-31
- 14) 綿引伴子「家庭生活の社会的変化と家庭科教育の歴史」『小学校家庭科教育法』建帛社(2018)21-30
- 15) 伊藤葉子「家庭科の時間数減少をめぐる課題」『日本家政学会誌』64巻(2013)451-453
- 16) 志知照子「『生活技術』, 食生活指導の事例生徒の実態と自立への課題と向き合う」『家庭科教育』74巻7号(2000)96-102
- 17) 文部科学省「第1章総則」『小学校学習指導要領』(1998)